

クラスのお嬢様たちは
えっちなオモチャに興味津々です

秋月月日



ファンタジア文庫

2979

CLASS NO
OJOUSAMA TACHI HA
H NA BOKU NI
KYOUMISHINSHIN DESU

CONTENTS



プロローグ ————— 004

第一章 無垢な彼女が羞恥に染まる姿は、
世界遺産と言っても過言ではない。 ——— 016

第二章 たとえ食事中でも、
ラッキースケベはやってくる。 ————— 093

第三章 おっぱいとは宇宙であり、
宇宙とは修羅場である。 ————— 141

第四章 バブみを感じてオギャった時、
僕達は真の男になれる。 ————— 211

第五章 心が震えるのが恋、
股間が震えるのがエロ。 ————— 247

エピローグ ————— 269

口絵・本文イラスト
ものべ


 プロlogue

出会いとは、得てして突然なものである。

そんな堅苦しい格言の偉大さを身に染みて思い知らされることになったのは、高校二年生になったばかりの頃のことだった。

(絶世の目隠れ巨乳美少女がエロ本読んで……)

やや青みがかったショートボブ。前髪は右目が隠れる程に長く、隠れていない左目は全ての感情が取り除かれたかのように静かで淡泊。ブレザータイプの純白制服の上からでも目立つ巨乳は無意識に目が吸い込まれるほど魅力的で、やや短いプリーツスカートから覗くおみ足からは健康的な色気が感じられる。

正直、エロさが僕の好みど真ん中過ぎる。まさにマイベストドストレートエロ。肉付きだけで言うなれば、今まで僕が見てきたどの女性よりも魅力的と言える。

そんなマイベスト健全ドエロな目隠れ美少女が、僕の家から徒歩十分圏内にある本屋の一角で、主に成人向けの書籍が並べられた本棚の前で堂々とエロ本を読んでいた。

(しかもあの制服、散華学園の制服じゃねえか……)

私立散華学園。

名前だけでなく誰でも知っている日本屈指のお嬢様学校。深窓の令嬢とでも呼ぶべき生粋のお嬢様方が日々勉学に励んでいる教育機関——とは言っても、あまりにも深窓過ぎてその内情を知る者はほとんどいない。名前以外に知っていることと言えば、せいぜい制服の色ぐらいのものだ。

そんな謎に満ちたお嬢様学校の制服を纏った目隠れ巨乳美少女が、庶民御用達の本屋で堂々とエロ本を読み耽っている。……こんなことが現実起きてしまっているのだろうか。

(エロ本の読み過ぎで疲れてんのかな)

瞼を擦り、深呼吸をし、再び視線を向ける。

——先ほどと寸分違わぬ光景が広がっていた。

(……………)

言葉を失った僕を一体誰が責められようか。つーかこの状況で絶句しないヤツ連れてきてみろよ。どんなにメンタルが強靱なヤツでも絶対同じリアクションするって。お気に入りエロ本を賭けてもいい。見たこともないような巨乳美少女が庶民の本屋でエロ本を眺み耽っているだなんて、マジでどこのエロ漫画ですか？　ここ現実なんですけど。

毎週購読しているエロ漫画雑誌を買いに来ただけなのに、まさかこんな素晴らしい出会いがあるとは。これが俗にいう『継続は力なり』ってヤツだろうか。いや絶対に違うな。エロ漫画購読をそのことわざに絡めちまったらことわざの考案者にぶちギレられそうだ。

——と。

『ねえ。あの制服ってもしかしくしなくても散華学園の制服よね……？』

『通報した方がいいのかしら？　でも、関わり合いになりたくないし……』

『おい、あれどう思う？　オレたちのこと誘ってんのかね？』

『こんなところでエロ本を読んでも、わんちゃんいけるかもしんねえな』

とてもとても注目されていた。

まあ、考えるまでもなく至って当然の展開である。

さつきも言ったが、散華学園の知名度はかなり高い。国内一……いや、世界有数と言っても過言ではない。そんな学園の制服を身に着けた女子生徒が公衆の面前でエロ本を熟読しているのだ。注目されないはずがない。

「……………」

エロ本に心の底から夢中になっているのか、女子生徒が周囲の様子に気付く様子はない。真剣な表情でエロ本を見つめ、無言でページを捲っていた。

さて、ここで一つ考えてみる。

変に注目されている彼女が、この後どうなるのかを。

その一。

周りの主婦たちが言っている通り、通報される。

散華学園の生徒だから、警察を呼ばれたとあつてはかなりのイメージダウンになってしまうだろう。もしかしたら親にこっぴどく怒おこられてしまうかもしれない。外出禁止命令を下されてしまうとも限らない。

その二。

彼女のことを性的に見ている店内の男たちに酷ひどい目に遭あわされてしまうかもしれない。誘いざなってんのか？ とか言ってたし、可能性はゼロとは言えないだろう。……いや、僕も彼女のことを性的に見てはいるんだけども。ぶっちゃけ巨乳とか太ももとかマジエロ——何でもあります。

その三。

何事も起きず、用が済んだ彼女は静かに店を出ていく。今日も世界は平和です。

その一と二に関しては僕の想像力が豊か過ぎるだけかもしれない。知り合いでも何でもない僕が彼女のことを心配するのはお門違かどちがいだし、何より彼女からしてみれば有難ありがたみ迷惑めいわく案



件でしかないだろう。僕の方が通報されてしまう可能性も否めない。

そんなことを考えていると、店内にいた如何にもチャラそうな男が彼女に歩み寄った。
「なあなあアంత、もしかしてそういうことに興味あんの？」

「……………」

早速嫌な予感が当たってしまった——が、少女は男をガンスルーしてエロ本に目を落とし続ける。イヤホンでもつけてるのかと確認してみるが、そんな様子はなかった。

当然、無視された男は面白くないようで、ピキイツ！とコマカミに青筋を浮かべたかと思うと、少女の肩を乱暴に掴んだ。

「オイ、なに無視してやが——」

「あ、ダメ……………」

少女が何かを呟いた、まさに次の瞬間。

「ほにゃふにゃほろはれひれほろ……………」

男がその場に崩れ落ちた（というより、腰が抜けたか？）。

「……………は？」

予想だにしない光景を前にした僕の口から、とてつもなく間抜けな声が零れ出る。

しかし、どうやらそれは僕だけじゃなかったらしく、店内にいる客のほとんどが信じら

れないものを見るような目でただただ呆然としていた。

「……………」

この状況を作り出した元凶ちゃんは無言で周囲を見渡す。表情一つ変えちゃいなかったけど、どこか困っているようにも見えた。

（可愛い女の子が困ってるんだから助けられない訳にはいかないよな）

我ながらキモイ感情だと思っ。

だが、僕は昔からこうだ。

どんなことよりも本能を優先。己のエロ心に従って即行動。余計なことを考えるよりもまずはエロに従う。相手が可愛い女の子なら尚の事。

それこそがこの僕、東条瑞希の行動理念なのだ。

「……………よし」

余計な思考を投げ捨て、彼女の方へとズカズカ歩み寄り、つんつんと肩を突く。

「っ!？」

瞬間。謎のお嬢様は顔をはね上げさせると、目を見開きながら僕の顔を凝視してきた。
「ごめん、遅くなっちゃまって。待たせちゃったかな？」

彼女に謝りつつ、周囲を視線でけん制する。ひそひそ話をしていた主婦の方々は安心し

たようにほっと溜息を零し、店の奥へと去っていった。ただ一人残されたチャラ男さんが未だに床でのたうち回っているが、あえて見なかったことにする。エビ反りアへ顔の成人男性に興味などない。

これで一安心かなー、と心の中で溜息を零し、件のお嬢様ちゃんの方を改めて向き直ると、彼女は驚いたように目を見開いていて――

「……わ、私に触れて何ともないの……?」

「へ? 何ともないって何が?」

「……そんな……でも、確かに触れて……もしかして、魅了が効いていない……?」

「あの、もしもーし? 大丈夫かー?」

「大丈夫。……それより、私に何か用?」

「いや、さっきからすっげー目立ってるからそろそろ移動した方がいいんじゃないかって指摘しに来ただけだよ」

僕は頭を掻きながら、

「君、散華学園の生徒だろ? あんまりこういう形で目立つのは良くねえんじゃないかなって思いましたね」

「こういう形で……?」

「白昼堂々制服姿でエロ本を読み耽っている今の君の姿についてだよ」

「……参考書を読んでいるだけ……」

あまりにも想定外の返答だった。え、エロ本が参考書って何? 現実には小説より奇妙な状況を作りに行かなくてもいいんですよって言葉があるけど、何も全力で小説より奇妙な状況を作りに行かなくてもいいんですよ現実さん?

「あ、あー、参考書、ね……う、うんうん。確かにそういう使い方もすることもなくもないよな、うん。で、でも、もしそうだとしても、やっぱり制服のままっていうのはまずいと思うんだよな。ほ、ほら、散華学園ってことはお嬢様ってことじゃん? つまり制服を見るだけでこわーい誘拐犯からしてみれば格好の的な訳で……」

「……もしかして、心配してくれているの?」

「そりゃあまあ。僕は僕がエロいと思った全ての女性を常に心配する生き物なもので」

「……そう」

想像の一億倍ぐらいうっすい反応だった。格好つけた僕がとても恥ずかしい人みたいに思えてくるのでやめてほしい。

「………」

謎のお嬢様は僕の顔をじーっと見つめてくる。いきなり話しかけてきた僕を怪しんでい

るんだらうか。……その可能性は極めて高いかもしれない。だって、知り合いでも何でもなくせに突然声をかけてきて挙句の果てに「君を心配してる」「エロいと思う」なんて言うヤツがいたら、僕だって迷うことなく警察に通報すると思うから。

と、そんなことを考えていたら、僕の手になややかな感触が走った。

反射的に視線をやると、件のお嬢様が何故か僕の手をにぎっていた。

「え、ええっ?! いきなり大胆だな!!」

「本当に何ともないの? 身体が熱くなったり、意識がぼーっとしたり、とか……」

「君みたいな美少女にいきなり触られて動揺してはいるけども……」

「……凄いい。本当に私の魅力が効いていないんだ……」

この子はさつきから何を言っているんだらう。これが金持ちと庶民の教養の違いってやつだらうか?

「……名前」

「えっ」

「君の名前。教えてくれる?」

「東条瑞希だけ……」

え、何? 今もしかして僕、逆ナンされてる? あの天下の散華学園に在籍している超

絶お金持ち目隠れ巨乳美少女に!? ……いやあ、参ったなあえへえへ。

「東条瑞希くん……もしかして、お父様が探してた、人なのかな……」

「えっ?」

「何でもない」

お嬢様は僕の手を離し、代わりにエロ本を渡すと、

「……心配してくれてありがとう。——またね、東条くん」

そう言うと、お嬢様は髪一つ乱れさせない完璧なフォームで店の外へと歩いていく。開いた扉の向こうには黒塗りの高級車が停まっており、黒スーツの女性たちに促されるがままに彼女は車に乗り込んだ。

車が走り去り、店内に取り残された僕は手元のエロ本に視線を落とす。

「……結局、エロ本は買わなくてよかったのか……?」

好みのエロ本だったので代わりに僕が買ったというのは、ここだけの話である。

第一章

無垢な彼女が羞恥に染まる姿は、
世界遺産と言っても過言ではない。

「おはようございます、東条瑞希様。突然ですがお迎えに上がりました」

目を覚ますと、謎の爆乳美少女メイドが僕の上に馬乗りになっていた。

「……………え、なにに怖い怖い怖い！」

「おっと」

悲鳴を上げながらベッドから転がり落ちる僕。一方、謎の美少女メイドさんは軽やかに飛び跳ね、床に華麗に着地していた。

「ふむ……エロ本にアダルトビデオにエログッズ……素晴らしいラインナップですね……………」

僕の部屋の本棚やら何やらを物色しながら涼しい顔で呟くメイドさんってちよつと待て。

「初対面の美少女メイドからエロコレクションを物色されるとかこれなんて罰ゲーム？」

そもそもあなた誰なんですか!? ここ僕の家だよね!」

長い銀髪を揺らす事すらなく美しくお辞儀をしながら、爆乳メイドさんはスカートを僅

かに持ち上げる。

「申し遅れました。私は鈴蘭と申します。主人からの命により、あなたを迎えに来ました」

「迎えて……あなたみたいな爆乳美少女メイドに迎えに来てもらえるようなことをした覚えなんて全くないんですけど……?」

「詳しく説明したいのは山々なのですが、主人を待たせてしまっているの今は割愛させていただきます……という訳であなたち!」

「ハッ!!!」

部屋の扉が勢いよく開かれたと思ったら、筋骨隆々とした黒スーツの男たちが部屋の中に雪崩れ込んできた。

「イベントの暴力! 男子高校生の頭じゃ理解できないレベルの急展開が押しかけてき過ぎてはなからうか!」

「時間がないので事情説明その他諸々については割愛させていただきます。さあ、あなたたち、なるべく迅速かつスマートに、それでいて傷をつけることなく一切の不快感すら感じさせる暇もなく東条様を誘拐なさい」

「イエス、マイマム!!!」

「誘拐!? 今誘拐って言わなかったか!」

「失礼。連行、の方が良かったでしょうか」

「何も罪を犯してないのに!？」

「おらいくぞ! 痛いところがありましたらすぐに教えるんだぞ!」

「なるべく快適に運んでやるが、それでもきつかったら躊躇わずに言うんだぞ!」

「ぐずぐずするな! トイレに行きたいなら今の内に行っておくんだぞ!」

「乱暴と慈愛をミックスさせるのやめて! ただでさえ状況が認識できていないのにこれ以上カオスな情報を入力されたら頭パンクしちまいますよ! わっ、ちよっ……うわああああああああ!」

抵抗なく部屋から担ぎ出されてしまった。どうでもいいけど僕まだ寝ぐせまみれ&絶賛バジャマ姿な訳なんですけど、このままだかに連れてかれるんです? マジで? せめて顔だけでも洗わせてもらえませんか? あ、ダメですかそうですか。

「て、ていうか、すっごく今更なんですけど、どうやって家の中に入ってきたんですか!?! 両親は!? 妹は!?!」

「話はすでに付けてあります」

「返答があまりにも簡潔過ぎて余計な想像しちまうんですけれど!?!」

涼しい顔で黒服たちと並走するメイドさんに僕の悲痛な叫びが飛来する。

そんな悲しいやり取りを挟みつつ、移動すること約三十秒。気づけば僕は黒塗りの高級車の後部座席に乗せられていた。

自分を囲うように座席に腰かけた複数人の黒服マツチョ。そして僕と向かい合うように優雅に座る爆乳美少女メイド。窓には黒いカーテンが施され、外の様子はうかがえない。ちっさいシヤンデリアか何かかと思われるライトに、ミニ冷蔵庫みたいなものまで搭載された車内。

ぐるりと周囲を五回ほど見回し、僕は深呼吸を一度挟むと、

「度し難い圧倒的な情報量!」

「リムジンに乗るのは初めてですか?」

「あ、これやつぱりリムジンなの!? 薄々気づいちゃいましたけど! 庶民なのにリムジンに乗っちゃったよ!」

「朝なのに元気ですね」

「あんな衝撃的な起こされ方したら誰でも目エ覚めると思えますけど!?!」

しかし、確かに少しテンションがおかしくなっていたかもしれないので、素数を数えて自分を落ち着かせることにする。

「一、三、五、七……ふう。それで、今更過ぎる質問ですけど、どうして僕はリムジンな

んかに乗せられてるんですかね……?」

「ん……それはですね……」

メイドさんは人差し指を唇に添え、可愛らしくウインク&爆乳を揺らしながら、
「まだ秘密です☆」

不覚にもときめいてしまった。

★★★

私立散華学園。

説明パートは既にクリアしているから今回は完全に省くが、件のお嬢様学校が何故か僕の目の前に堂々と鎮座していた。

「……………」

豪邸にしか見えない校舎と野球場かよってぐらいに広い庭園を呆然と眺めながら、僕は自分の頬をむぎゆりと抓む。めっちゃ痛かった。

「……………」痛いけど目の前の光景が信じられないからこれは夢だな」

「現実逃避に躍起になっているところ申し訳ありませんが、完全無欠の現実です」

「メイドさんに起こされて黒服マツチョに担ぎ上げられてリムジンに乗せられての時点で既に現実離れすぎてるのに、そこから更に日本屈指のお嬢様学校に連れてこられるとちょっと庶民が理解できる範疇を超えてる気がするんですが!？」

「お気を確かに。これからもっと心臓に悪い出来事が連続するのですから」

「何で涼しい顔して更なる脅しをかけてくるの?」

★★★

「よく来てくれた東条瑞希くん。私は君が来るのを今か今かと心待ちにしていたよ」

「……………」

本当にもっと心臓に悪い出来事が発生しやがった。

武骨な顔つきにダンディな顎ヒゲ。スーツの似合う高身長、そして見ただけでも高いと分かる金色の腕時計。

どこかで見たことがある。凄く見覚えがある。最早見覚えがありすぎて逆に見覚えがないレベルのダンディズム中年。

そう、彼の名は――

「——喉の辺りまで出かかっているんでちよつと待ってもらってもいいですか……?!」
 「あつはつは。まさかこの私を知らない者がこの世にしようとはな。あつはつは。何とも無礼な奴だ。あつはつは——死刑!」

「名前を忘れただけで!」

「冗談だよ。神楽坂ジヨークだ」

神楽坂。

その名前を聞いた瞬間、僕はようやく思い出した。

「神楽坂財閥総帥、神楽坂北斗さん……つ!」

「正解だ。そしてこの散華学園の理事長でもある。よろしくな」

「ひゃひつ! よ、よろしくおねがいしましゅ……」

「あつはつは。そう畏まらなくても良い。これからは教師と生徒の関係になるのだからな」

「あ、はい。教師と生徒の関係……あの、今、何て?」

「ん? その反応……鈴蘭の奴、何も説明していないようだな。つたく……相変わらず困ったメイドだ」

仕方がないな、と嘆息すると、神楽坂北斗さんは両手を大きく広げながら、

「東条瑞希くん。君は男性教材としてこの学園に招かれたのだ!」